

所感

専門委員 手塚 寿 男

「おもひ」に「火」を懸ける。『古今集』巻一九に「俳諧歌」が五八首ある。俳諧は滑稽の意で、古今集の俳諧味は、懸詞や縁語を滑稽的な技巧として用いている点、卑俗な語句を用いている点、擬人的手法を用いている点にあることが指摘できる。

(2) 甲斐における生活を反映している和歌

かひのくにへまかりける時に、みちにてよめる。

夜をさむみおくはつしもをはらひつつ草の枕にあまたたびねぬ

(「羈旅歌」四一六みつね)

かひのかみに侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける。

宮こ人いかにととはば山たかみはれぬくもゐにわぶとこたへよ

(「雑歌下」九三七をののさだき)

しほの山さしでのいそにすむ千鳥きみがみよをばやちよとぞなく

(「賀歌」三四五)

塩の山や差出の磯に住んでいる千鳥はあなたの寿命が八千代まで続きますよと、ちよちよ鳴いていることだ。塩の山は山梨県塩山市、差出の磯は同山梨市にある。塩の山は笛吹川の東岸にあり、差出の磯は西岸にあって笛吹川はその中央を流れている。昔から風景の名所として知られている所である。

以上は上代文学と中古文学(『古今和歌集』)について、作品をかかげ解説したのであるが、歌謡や和歌が古代の作者の感情を素直に表現しているのを深く感ずる。『甲府市史』の中にこのような文芸が豊かに取り挙げられているのは嬉しいことだと思う。それに付けても編さん室に苦心して集められた編纂資料を整理して図書館とし、甲府市のみならず、県下県外の研究者の研究に貢献することを願ってやまない。

いままでに關係してきた自治体史(誌)はいくつかあるが、調査・執筆しているうちに親近感が深まり、新聞の地域別欄にいち早く目が行くようになった。甲府市の場合は、市史編さん委員会専門委員を拝命したのが昭和五八年(一九八三)七月一日であるから、現在までの約一〇年間は、私の生涯のうちの重要な一部となっている。大正一二年(一九二三)の関東大震災より少し前、まだ学齢に達していなかった私は祖母につれられて、新紺屋町で豆腐屋を営んでいる親類に二、三泊したのが、甲府の町に触れた最初であった。盛り場の様子などはほとんど記憶にないけれども、鉄道馬車に乗せてもらったことと、親類の家には同年の女の子がいて、「イキンセイ」などと発音しながら話すのをひどくハイカラに感じたことだけはあざやかに覚えていいる。昔勤番の武士が甲府の娘をからかって、くるわ言葉を教えこんだ名残であるとわかったのは大分後年であるが、庶民の歴史を重視する『甲府市史』の執筆に一〇年前から参加できたことに、何か因縁めいたものすら感ずるのである。

『甲府市史』の既刊一四巻のうち、私がタッチしたのは史料編第二、五巻と通史編第二巻であるが、それらの執筆を終えて発刊されたのちに、正誤表と年表の作成を担当したことは、近世関係全五巻をおよそ二、三回ずつ読む機会を持つことになった。それを通じてのおおまかな印象としては、鋭利な論述のみのコンペイトウ型ではなく、ふっくらとした老舗の饅頭になぞえられるような市史になっている。

『甲府略志』は、成立当時の史観にわずらわされた点があるが、それを十分吟味した上で史料として用いた部分も少なくない。近く完結する『甲府市史』も、将来いつかは改刊されるときがあり、略志が果たしたような歴史的な役割を演ずるかもしれない。その場合に近世時代については、享保九年（一七二四）という遅い時期に成立した直轄都市甲府が、甲府家・柳沢家の藩政を前史としながらも、勤番支配制度のもとにおいて、商工業の発達や上下両層町人の生活と文化が、どのような特徴を持ちながら展開したかを中軸に据えたいらさばらしいと思う。

『甲府市史研究』最終号発刊にあたって

専門委員 増田 廣 實

「十年一昔」とも、また「光陰矢の如し」とも言われる。甲府市史編纂に近世部会専門委員の一人として関与し、すでに十年の歳月が経過すると聞くと、どれ程の仕事をしたのかと省みて、心中忸怩たるものがある。

甲府市制百周年記念事業として進められた今回の市史編纂は、多くの点で、過去数度にわたる市史編纂と異なる、画期的なものであった。その内のいくつかをあげると、次のような点であった。

第一は、従来の市史等は、『甲府二十年史略』以来、市制七十五年を記念して行われた『甲府市史―市制施行以後』に示されるような、市制施行以後のみを対象とするものであり、また三十年記念として出された『甲府略志』にみられる永正十六年古府開設以後のみを対象するものであった。しかし、今回の市史はこれと異なり、原

始・古代から現代にいたる甲府地域の歴史の全時代を通して明らかにしようとするものであった。第二は、対象地域を旧甲府市域のみでなく、昭和十二年以来四次にわたる市域拡大を視野に入れ、江戸時代の旧甲府城下とその近郊八五カ村を含む現甲府市域全域とした。これも今回の大きな特色であった。第三は、編纂事業規模を従来に比較して飛躍的に拡大し、『甲府略志』が僅か「百有余日」を費やしたのに対し、ともあれ十年の歳月をあてた点である。

右のような特色を踏まえて、それなりの成果をあげて編纂事業はいま最終段階に至り、『甲府市史研究』も最終号を迎えた。しかし、考えてみると、こうした事業はある時点における記念的事業としてのみあってよいのだろうか。ある限られた時間内で、手際よく、効率的に事業を完成させることの意義は、一応認めはするものの、何かしら不安を感じる。それはその事業の成果が蓄積され、次回に向けて継続・発展させられていくだろうかという不安であろう。現に今回の編纂事業の中で、常に感じていた不安も、先述したような画期的なものであるため、先行する研究成果や蓄積を欠いていたことであった。それに加えて、限られた時間内での仕事であるため、調査が手薄となり、既存の甲州文庫史料に大きく依存した。そのため、史料所在目録のような、次回市史編纂事業につなぐ基本的な蓄積が乏しい。

聞けば、今回の市史編纂関係資料は、新市立図書館に移管保存されるという。しかし、こうした体制が作られたにしても、資料を整理し、それを利用できる状態にならなくては、単なるゴミの山同様のになる。そうした状態に陥ることを防ぎ、次回の市史編纂に役立てるためには、市史研究の火を消してはならない。市史編纂事業の新